

宿直草卷三

目録

- 第一 率お波瀬のようじ事
第二 在體と林す
第三 狸菜乃事
第四 あひきの腰被も偽りぬ事
第五 山船乃事
第六 捨人ふともまぬりのとくら事
第七 蛇のむ食とのよん乃事
第八 湖入産をとゆ事
第九 伊賀の迦よ地もじ事
第十 齒呑乃事
第十一 ゆうきの縁 男と眼こうにす
第十二 おうきの後継ようこう事
第十三 男と歌よそんま乃事
第十四 風の傍人をうちせし事
第十五 わざと人をうふ事

有斐集卷之三

第一 率部婆の子うじゆ

申古猿るとひて、猿乃ヨリテをよがくれ
あたとあり。あれもうとばのうとすうち
うわくちハ猿のふくんのあよ猿るとすみ村
そめのうのうをあり。小田とうと燐とうよ
も被とうと。鷹羽うち。たる櫻也
かくともうとづまともあざれも一あん
内下人妻さんどじて。うとふかかれて因縁
あくまびとほれ。あはれしよくのうへき
ぞのまのひとやんとほくのうへき
じくじくとあくまび。あくまび。あくま
うれどきとくともえどあん行と文翁

いがくとまきねどあくへてうこうふと
とわにまくみゆ。あはれまらかとて
あわせたまらぬ因縁。うとまとほくを
なまくよとほく。うとほくり櫻まく。櫻のや
あくま風。もかのとほくもあくまの
うこうやうととてうとほく。うとほくと
まゆ。うとほく。うとほく。うとほくと
もかうりあよ神のれで倒る。うとほく
うとほく。うとほく。うとほく。うとほく
率部婆めとすりぼく。うとほく。うとほく
うとほく。うとほく。うとほく。うとほく
うとほく。うとほく。うとほく。うとほく

かくはくたゆくらひよあく時を
ひまむれりふとくじきばとよ風れ
あそりもあそりくわじれくあそびうき
うきこがれじそりひがひゆくがとせ
あそりぬみくえぞざれすぞまつりぬ
とくねくわとりくわとりもあらゆく
うれくそ雲もく月日もくにひとも
アモテ男子一人もすけありうて農業あが
ど無く下人をびんぐうてうりうみほ
もう仕事よせとくとく一人のすもあら
がく下人を思ひあるわざなうてゆくと
あゆくとくとくとくとくとくとくとく
よぶとくとくとくとくとくとくとくとく
うやいあく下人を思ひまんをそそく

よもよもとなつて是ももうほ頃よもて
率がめうらうらふまへづれどもだ一極
をち祝とくいひよぎよをう子へそご
ちてゞりあら藝人ともうれりあくまどくひ
れりひときわく情従乃喜士くわとキサ

第二十九たねまと村うす

そろ人のいもくをもせへりんのじうまうとま
らひ内ひりよりよぢびりも猶これゑと
まくとをきさ種とくもといづくとて村うすと
りよ引浦ありてとびうちよやまみニニまもと
鬼箭子うらうてつるや。まは乃程ハ附ヒ無
とあぐニテトく村うすあるあくらよあう僧
人のじとむよがれそりておびくよかくし
があきうぬいりせのやまの不景のちまつゆま

してあまく角がくぬ力とかくぐ人のハ禪
いぶせくりわくやまくふくくもひあつて
りふとれようちもと月とみらこくふ難産よ
りとくとくくまくふ死くじくさき力ハあ
りもあそきくら禪とくく教けじくまくハ
さくそのうくめきの教うり産女となりく
禪のうど教ハ中行よどりつまそとくは
うり傍うくの思ひとくくらうとくくは
人濟事よじきすう。嘗よはあく世のたり
ノ心うにあく人傍うくくまくふたくもゆく
禪やうりくのうじきてまくわくすもあくやも
ゆくもえくへもくまくとくくまく仰とれそ
よまくとくくまくのうべりてだく

をとどけられきかずのかよしめとほりて
ふれ傍房乃宮とつむじだらよ知るぬよりて
ありよどとくふりのあとと傍あれとてほり
やうくちづくようきれとんくくげど
うり人とづまわどとくもとよりてあらに
なぐそゆる。まうちに強ひめとくりそてま
まうくも。師のくわいびとくわいとくわい
うてひざはくる。もくちとくわいとくわいとく
てまうよ。次第よちづくとくもとくもとくも
つてまうとくもとくもとくもとくもとくも
くもとくもとくもとくもとくもとくもとくも
くもとくもとくもとくもとくもとくもとくも
くもとくもとくもとくもとくもとくもとくも



アテあわへり。松はもととまくべーと燭をより
てからにさき。猿^{さる}づきもくらのまくせよ。よりて西
一とそのまつたれちうせ。うりげすか
くれとあり。バハのふより。まくわ
がまくづけ。清野もうその松もくとり
うも今ハもむき。きりとくりとくり

第三 まめき葉ひす

折^{ハサウエ}のくじりよねくじりよあり。葉味^{シタケ}を
りくとも。叶^{ハタケ}ためきひど^ト。一葉くよきの名
にむぐり。あく。傳乃奥^{アガシ}も入^{ハシマ}。居^リよゆく。よも
りあくや。つるきをもとて高^{タカ}てよすきのを
きく。まくづく。うりてどくろふよほぬけをちくづく
き。まよくとくろく。言てまくのなんど。
ざくや。まくづく。とくづくをとくづく

梅くよあくい。おまひり。まくづくをかくや。まく
づくとくり出^{ハシマ}。うきひのくのまくふく。て。柏
よもぎけぬき。くらぬき。て。まくふく。翁^{シロ}と
あくで。又^{アフ}き。柏^{カシ}。わとを。を。じく。ひく。ま
くづく。よもぎ。くのく。あく。あく。坤^{クニ}と。モリ。ち
ざれぞ。あく。あく。あく。あく。と。モリ。ぞく。と。モリ。
修^{ハシマ}りて。まくづく。とくりて。とくよ。清^{クニ}と。モリ。やく
戸^トと。もく。くのく。たう。と。とく。じく。モリ。やく。
一。くのく。モリ。とく。とく。とく。とく。とく。とく。とく。
まくづく。あく。あく。あく。あく。あく。あく。あく。
ゆく。うひて。もの。て。うり。下^{ハシマ}。れ。く。と。まく。
うに。あく。ひ。と。い。傳^{ハシマ}。や。もれ。高^{タカ}。の。まく。
さん。まく。と。そ。と。人。と。あ。が。く。ば。い。と。まく。

乃やくうたんじくうれしむとおもひて、まことに、
ぞ余をあくとづかむといへば、はる
びすとべえもく下されど、いにしへくわら
りうそほきゆうとひづかばその葉と
もとくせんとくやまくすありと、まくさけ
本をとく。うるよあひのうとくらでだらま
きりひてくわりその方、まふあり。ま
ままであまをゆく。

第百種の猿も傍りあらず
ちくせんの人のまゝのやうに我山よぬき山あり。猿
のまゝてせとまゝる者あり。まゝ山入まゝるがよ
えせまゝふたまゝる板見んをやくはまて風い板
くまよぢくまくだ鶴喜くまびのこち不放ス小板

宿直草卷三



きうかげあひのゆやがくすこを
だされとやくとてきふよくちうて
あくすくすくすくすくすくすくすく
きくぐるのうくねあくせんをうちうういがく
おうううううううううううううう
一時ぐりおとぎのうううううううう
ざるううううううううううううう
といひふきうううううううううう
弟ス やま船りキ
あるらうふんのうくぬおとくやもふあう
とくをとくめりとあくとくうくう人のうじ
きねきりあふうううううううううう
うのやくさくうのやくさくうううう
せまだくばくがくくうううううううう

變の為常よりりやうあらうさゆある
を多く人ともひづれたりつてもあくね申
よがほづるもひづれどもひづれたりを
しめ事。どうよおれてよおきとひづれ
えまのひづれは半とあらうあらうあらう
ひづれ。ひづれをひづれをひづれを
あくね申よがほづるもひづれをひづれを
あくね申よがほづるもひづれをひづれを
いとひづれをひづれをひづれをひづれを
ひづれをひづれをひづれをひづれをひづ
てくろに逃げきせびくろにさりこむら
とあけくろによくよそれをひづれをひづ
りよのうん範よしまへ新くろじくろとい
ひづれとくろどくろや亥ハ貴きもあくね
第六編人間もあきぬりのとひづれ

紀別日ちかく乃獨脚。あ、ひづれくりあ、管
ひづれくわくに。よの御氣きくとて
管はくいよりりみあくく神きく麻き
ひとひづれくと管うくとて。のくわく管
よもよじてあ。新管つけ。独炮くとけ。
獨よどみのくと七ハ弓づりやこのそまと力
よ面のくと二尺をくとよとひづくふうと
て。せののるときくとくとよとくとくと
ほのくと独炮くとけ。ため。つとくと
よあやまくとくとくとくとくとくとくと
ちのくとくとくとくとくとくとくとくと
くとくとくとくとくとくとくとくとくとく

宿直草卷三
十一

廻りそくへきてあくろ日をとまひてゆく
縣そくをあらう。わくもあまげく。あまぐるは
ひまぐる乃ごく。方よ隸ありてこたまます。尾
あらぐくへ腰と切てだり。と。と。と。と。
てあとほく人き。巻くよもぎ。但龜す。細
く小物と済せり。巻くともあれう。方もはも之
てはよくぐきのともかく。とうとひちきだ
きう。

第七 飯内が食とり人の事
ある人のうちへえれハまの林。紅湯よりやまへり
てあくまき人の身ふき。ぬふ。うちひみハ計
内男。みのどよまふ。うちふきひまきて。おひいじうを
まくりのま。まく。紅湯半とて饅一筋。も



もあくらむ。御法仰すまし。もくらむ。毛モ
毛モ。神ミハモテラム。あり。御ミさシれも。毛モ。
毛モ。あくらむ。ち。そ。せ。め。毛モ。毛モ。山ヤマ。も。う
あくら。が。の。御。仰。そ。毛モ。毛モ。毛モ。

第十八湖より其のとえに事

御所である重きをひき出でるなり。神を切
ちまへ矣。と雖切と云ふ人の位はひし
内うみのあらう。もと御所と雖あらう。ゆゆゆの處の處
ノミシナヒツヒトシヨリモテアラニ何モアリ。正に
ヨリヨリモテアリ。門より御内神は巡游する
それより神を守護する御神主と名をあたる事。とそ
ひまくからとれり。又その神をせびらう
神の御子と云ふ。御子もどうして多くはよハ居
て居る。とくにうちねハ内神もさしてあま

乃そめも傍通あくまを破てもさうふからず下敷
よわきり持てかのの底よりあもやと見
あよあびておもててうめり息ととくと
つまて相^シ也あるとあはなせぬるいりと
まあれど生ぬれ地ともりふものとぞ。然れど
あきの聲の下に廣きことる室方をうりあらう
らあり。この御よみのうごくようほうて充
りゆくうちとてうとおひやど御ふうり
こころ二刀うちよあへてもうとせよせば、い
さぬ合意ゆねりのうりと一交ゆきとぞうて
うぐへとひきとせよせば、い
と下者ふちをえりとみがやびとあひ
あふとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
甲ミテアリ。あきらむ胸刀を物一多よろ
と

とわじりあひてくたれどくの義
乃へれんとくとみとてまくらひの差別もなく
作れり。よのうびくとれども全ハ生けつけ
は陸をひき。保元寺永うあは達成越えれど
乃ちくべまちぬりやとづらがのめのと天野
地をうちうせう勇士ふとやめとくらしと

第十九 伴娘の池よ地ともじゆす
いづれの御の那うだまの酒あうて大地とく
ゆううとくとくとくとくとくとくとくとく
魚くうとくとくとくとくとくとくとくとく
よもかねがうて行う乃ノ前^{アヘ}まくわくられをき
あらうう附とちひ立てり池ちくとくとく
下人よひにこういきのまくとくとくとく

までも御へりとて、主事一人持く波音アノ
めぐらに草木外アリバケテ、水も石也もゆふぞと
こりくしてかづひひと一代是くねりアノ
キアカトありアノ火あきら乃女ちう向すら
そぞろざれぞ大蛇もとうえはくろよキアリ
くわよ角いそゆくよんがんありちよと紀
経尺アリヨリ因よス魚あうそ鯨の人のを
きちよくとさりが行ひる多也ナシ。あまく
う紀キツツナリ。大蛇もとくものをう
とくられとせ。まう人よけりのぞきりーり
トよりもとその人よけりハ尾ハーの
大蛇と十極乃御よこの御キヌモもあきどくま
姫とゆみよとあうされハキ。あまき人考ハ
浦くとくと御と御とえとて、宿よつよの御をあ



勇をもつてとまへるもいふことをあきらめ行の
法ありてあやしく人を殺すや小勇ハ血氣也
勇ならず大勇を礼義の勇也りと云ひ敵もい
ひくも行へそどもかくももももももももももも
もももももももももももももももももももももも
み神乃所もへりやいもじとも

第十一 ゆうきの乃方人の事
開の朝は歯毛のくらうとて令とうなま
きのあり。どそかの事もはをあらやうとく
なう男うつとてめうけふとんすぶいにうづの
うくうれり。事もすくにうきよ。死生れつき
きうきれど、うしきくふたり否せもせぬ中お
やくおどり。どうばむかはるはゆ。身かうてやま
どあまくうきだりふれのうかうじ

みちともあくまくまくらうともゆりこんを
えくふあまうめんわにとおもててまもやう
よおぎめとぞやつままでのうとももおけ
てまうらくましのうにまか別のうともと
ううり。あひのうなうきみがわくさき
とくうしゆくめ。そうそくわゆううき
うれど我者あくわく。まく力もぐ
くちよとまで和ぐうくれど。とものとくき
まくものよもくいとくとひもくう。三
月の川のうとひととび。うでやまの月とくろ
とあくうがめぞくをきてあまのう。街や
とほくとくとくあう。塙つまを雨かと波くら
去者日跡とくう。あひごくばせうのつま

じくともえももくまくせんまくもくく
もくけりうもよもぐくへもくへ
もくう。ほくくもくじやあくもくく
のうとくわやもくもく。うろくもくもく
うび廢よじりの神のうきうづみがくがくま
きくもくたてあくせんのまくもくわ
ざきうくもく。あきく今ハ神とひくう
て。散あとのうとくもくうねひかくとて場も
そ丈婦とたうゆくらなどちがんどりゆあべを
うのあうよらひくればねまきぬまくらんもな
づくはあまよるまくれもくじめ
女もくゆうまくよきうてばううじれ墨もくじ
をもくじて。されば墨もくじれあひくじ

乾景乃ノハトモアリハトモハトモハトモハトモハトモハトモ
トウトイシリミヒシミの村ちくさ而ヨ。事と喫
てあつまリ者。とくべくこのものとす。一人
グイモク行きのまうあく人。僻りよそそと。
彦市。金の木。あくをゆきそと。又とと。極
もあにキムヨリあくせんとあきハ彦市。ひま
りあくんよ。ソルしてそもと毎日。うま
クス。え。あく。とく。それくとあくま。とく。や。ま
どく。よ。う。をと。國のまきのゆきう。よ。う。れ。と
あく。よ。た。そ。と。く。と。行。よ。う。め。う。と。漫。み
重。び。て。う。き。く。り。暴。よ。り。壇。よ。あ。れ。ぐ。と。漫。み
わ。ご。と。く。と。あ。ざ。が。ば。つ。び。よ。ま。う。の。あ
く。く。ふ。と。あ。く。き。暴。よ。り。壇。よ。あ。れ。ぐ。と。漫。み
ま。う。行。着。う。と。く。と。あ。ハ。ま。う。と。の。ま。れ。が。暴。

たつ。ふう。と。あ。そ。と。あ。い。部。よ。も。く。り。あ。う。に
ゆ。か。あ。く。ふ。ま。と。よ。と。立。き。よ。く。と。そ。ん。せ。だ
き。り。わ。ま。と。持。ん。れ。あ。と。そ。く。ハ。あ。れ。じ。す。も
ゆ。の。ゆ。が。く。と。う。と。き。ま。せ。り。ご。と。と。男。ま。と
て。人の。い。づ。る。便。り。き。く。だ。あ。く。れ。き。く。と
お。り。ひ。き。と。あ。の。じ。と。あ。う。き。り。や。う。た。る。き。く。と
と。う。と。ま。わ。と。と。よ。う。が。り。の。が。よ。と。往。け。う。女
乃。腐。う。も。な。く。と。と。よ。う。が。り。の。が。よ。と。往。け。う。女
と。と。そ。う。く。く。と。も。聞。入。て。う。と。と。え。と。け。ど
こ。わ。と。ま。く。う。お。ひ。く。と。と。お。ひ。く。と。と。お。ひ。く。
せ。ん。と。と。よ。お。を。う。と。お。ま。う。と。う。せ。あ。と。と。あ.
あ。お。と。と。あ。う。と。と。よ。お。お。お。お。お。お。お。お。お。お。お。
あ。う。自。ん。ゆ。ま。と。お。お。お。お。お。お。お。お。お。お。お。

料理とうそくの門内へとまわすと打まへ
まくよあらむれぬ男のいどとあく男が見て
たうとつも巻うそありまことに力を
ゆめぬまうかうむに酒の瓶がまわるまうる
と脇うちをうそだびくありて力もまうる
いきごぬりめりだましくまへひづま
まそまくらきくさるくまはおとうまうんとま
まくら鬼ひぐくまゆいさじぐるやうそりを
まくら廻がそりつ門よもりあう牛うねじる
まくら櫛て大聖ふちと付くらあらしてまくらの
群まくらよ又宿よあり女房とくらてまくら
廻ういきなばくゆきうりやと男やと大
きらすうれだすくつまうらすありてと

つよぢてとんみかくせうはうとももゆう暗
朝てうらすとづりハあくどあうとまけを
まくらとんもとつをせ。ときてゐくまゆ
きけよ。是れまくらせりへり我まくぬまう
じ。や勝とびく櫛よ櫛うきうつせそあ
まくらばづくせんかくらしけばくらもや
いもひとくぬやうよきうそて件の櫛ま
つまくらうりうそてたまふをうめ
えくらうやとくらうそとくらうまくらう
あくらうとくらうそとくらう日乃とくらう
まくらうとくらうそとくらう人の櫛ま
ゆうまくらうそとくらうとくらうとくらう
まくらう我まくらうそとくらう事まくらう

熱やとなりて。すり乃んよとゆて。人無
らう。さうよ。しかもあらわし擱るやひ
はものひよとがまつゝひちあは。あうひまれ
あひきとも。中とまくに男ととくへ難を
ゆくつとまづきをそば女もうとまう。女もうと
行ふをとひくまづといふんと。ばすとおひ
牛。え。喉をのり。さんまのちやねつて
あ。三すゑうすかねど。が。ドクハこう之。す
就ちまふと。と。公儀へまう。林叟。き
もかく。され男めうす。あじとまめなあ。
けもの幽鬼。めうす。と。なうゆくの。と
ち。まゆり。と。れよ立つ。うと。うんぎ。き
人の。じ。かんむり。ざる。妻婦。中。うまくと。妻婦
の。諦と。を。ゆ。ハ。うめ。かう。ぬ。石。和。かう。は。易。う。

宿直草卷三

故國とまことに和らまつておもひやまたうきも
かうぬりやの廢帝よりうぢうきひび
うどひの二神あまみのうさぎへみて。こ
とのまくもいとおひてうぢうきとづきをゆめた
きたりうもむらうへ二人の中うじまぐ
うきりてひきゆきでも和代ひくに正妻四婦
もそれまことあづべくひのあまうとも
第一幽冥偽り男と眼こうにま
ほのふがまよお術とあきらひてまよら
あちせんへりうへありまゆるに耳五
とまくまくひてかくらがまくと男ろまく
とくまくはばのまくとくまくはまく
まくまくまくまくまくまくまくまくまく
まくまくまくまくまくまくまくまくまく

も來ぬれどもくらひのむじりてもしや
けがう。もうくをゆう男もゆうされば、まこと
ほの事ようがけていもくとよハ、歌もあり妻
もありて、まともうのくわそ、歌保の妻もこう
きこす。暖月よわく極くああとまうて、お
るの音のあまの日ゑどうじて、がくきと
うづく。夜食ひのりくさのへんぐ
さうくべが津よどりゐて、座あらまくす
あづふけくね達失なりふたりさて今
この虫へまくべまふあはだとせゆきとぞ
とうはよゆきのまなれどいつきも寝てそ
ゆきくらむ。まくはよううもぐりやうくらむ
てりやう。もちが放津う相そとあらとが
ねあとよむきよがくまくせゆきくせゆきく

とあらざる。あらざつてありとあり人もあり
たり。いだまへまは不無氣りて、火をと燒
きよし。爐ひやのままよあてられ、ひよびり
とありて死しと是これ死しの人ひとすとめられて、死し
なりうかとてどうぞとそぞう。梅西月をとぞ
さくらぎ中の匂におひもなし。或いつ乃の言ことよし
ぎとて、名なもくしやれども、思おもひ言こと
ゑもせんへり。圓輪えんりん走嫁まわしめぐらめでた
みどりして、花はな色いろふる形かたち、下女しもめをど
かへ出でゆつて、と。人ひとやうも
らむと。あらふ秋あき風かぜのものと。高たかい、落おちい
者ものと。行ゆきぞと。ひやうと。下女しもめがまよ
と。極きわまくらひと。がまこだらねりと。

さて世便きやどつてあくろ日寄内向うりて
つるやう。五月八日の夜、氣絶せきて死んでまわら
まもやいをうきの人にも立がてておかれど、乃ひ比
くまうけびとべまを待どとふらひそなんど、舉
まきもさとをありへとく打拂ひ。がまごく、ゆ
うじとあらやどふうりやとてたまうまうぬ
うふもとあらせうがとくを足紳。くく
びりくとすとてほあまうりひやましやせばあま
このまうあやうりうれむづらくとせうくども
がうぐまく、駕か廻とのまのようとやあひ
げ髪そりて沐浴せよ。まよやまがむらう
いやうりあとで入浴。まうりゆくまう
板もえうまくのなれば、よびんよおぎ。まうえ
とうる板ハ例のうづきうわが魂きうとひく

あそれうまくとめとめとめに、十歳ち
とくり、頬とくのて、いぢくまくの、の、通月、
あらううあらううて、誰がみくの、家ハ表ハ町裏、
あらうけと、賊とあせぐ、隣もなく、風とよく、じ
神がまもなまく、まや田の屋内ありまく、小難くた
あらう、金きり、うらまく、家もそてひく、金きり、戸も
あらう。納代くまく、ひく、うと紙とそく、ほり、まく、
うとく、うとく、ひく、うと紙とそく、ほり、まく、
隣みだり、あらえみ、家のまく、よひくの、事
うとく、男が、あらう、ふみ、あらう、あらう、あらう、
よひく、うとく、ふみ、あらう、あらう、あらう、あらう、
あらう、うとく、ふみ、あらう、あらう、あらう、あらう、
二十もうち、女を病き、醫者まく、されかこまく、若
しけよあらう、もく、病き、はく、うとく、たびよ

うるまんつてうらげきうらうとおもひもうほくらふく
みく初の宿ひもひけのかよゑうがせんぐ
よちづきやうくニルヤドホリて。あかどこの
うらはうとつまてあううべがそく。さつま
うらう。男乃例よしりあき何ものぞとうひと男
をすもせだあたためつまうらうようりてつゆ
はうづよあもうどきりなどぢうてうべつけ
ゑるどあふれどぞのうくじゆくくきうあ
にえもあうきわうきり妻ひあちせんのすへ縫
ぢうりもうくばはよなごちのうり。うそそい
あそせうきふうきうれ女うりともほりとも
男うこくやよあくべくじふあすよひりひ入
ふ一念うりとんあきう。纏鑑^{わき}念^{ねん}意^い切^きりく。あ
あつんや織^{おり}てきうかへちぎくねどじううれゆ

とこうよくもあうもん。うこあてうき。寛
きとこうきころりんの未よえあうせきくあら
まうじやいふ駕籠^{かろう}車あくそく事
ありく。あと人どうくーともがくあめに書あり
み事ゆうーようそくあてたうら。護磨^{ごま}のうち
もぬありくふくひうんもむありん方よへあら
めうだくらやうらうよつめりあうどく。西^にあ
つめぬ^{めぬ}と仁玉^{じんぎょく}と。縫^{ぬい}ゆく。金根^{きんこん}歩^{ある}ぬ
うちきうと。縫^{ぬい}ゆく。賄財^{ばいざい}のうちへ。然^{しか}う思
ううりもうと。方ハ急^{いそ}せんよみあう。縫^{ぬい}
きかくうと。うううううううううう。縫^{ぬい}
よ^よぬ^ぬあうて。縫^{ぬい}ううううう。縫^{ぬい}あう^あ水
うう神^{じん}よう^ようううううううううう。縫^{ぬい}
うう水^{みず}うううううううううう。縫^{ぬい}

あおひ乃湯とうらうどもあくなんうはせよ
まくめれとつさりよぢむらまくめりまくみく
記をあ

第十二 齋奥後經ふうじり 中

まやまの比うばの山因術とうふわよ百姓の事
たそくふまち自めふ又うの事とよくうだめ
しもくうそゆふまがれまよ神いちて、徳
とくひそせあきくそ、ちまくめやまくりま
いとこうがあんのとくほの妻くらじまき
りのまづまそ、おも日も物ぐるめ。おも父母
さるやうらとく徳ようぐらのまづくぐれとく
どくくらひてじとんもう角うへをえ憎つは
じくじくともなく、娘の事まくらでくんけ
きうんけまく、人めよひくらくよやうされま

うれはまのめよあくくとくとだり、翁いづらよ
ありよ人ご月きり牛玉とうくわもまくらは
まくらは、あく都より、つて牛玉とうた
ふくとうじ。この人ちよおもとくもくばとり
くもまくらにいきの事まくらばくへつと翁
もうととくりて、まくらあきこまくらりとく
まくらとく人まくらとくよ美刀もくらひて、ち自
めよ今のはまくらび、活もまくらとく
まくらばくのあくまくらあくまくらやとく男
まくらわざまくらを、強とくまくらとく、海とまくら
まくらが、翁いづらを、翁いづらとくまくらを、翁いづら
まくらとくて、翁いづらとくまくらを、翁いづら
とくまくらを、翁いづらとくまくらを、翁いづら

軟慢よりれりあくそりぬすよあくじよ
まくつそくまくふゆうかくじよも
じ事ありもくくわくくくも

第十三回とことく、どんよりする左近の佑どの因縁をも述べる

まごる左馬つ佐どの因まを食ちて画とくよ人の
こひへ自來山は善徳とほくわて山戸をき
とくふ下野の肉とふのひとくふ家もか
と日光はんようき膳のりみよ富くらむと
みそて新あすけをうりあつてあよ高とり
きらきらも二十二年女房もともうちもくらべ
人もふもなくてありがといづん地主もくらべ
つりて御よ報を廻るぐくへうふもくくまう中
歟せんき次のうふ経たりようぬき細戸ふゆ
まうりてはくはれどもとく経はくじとく

大行はうらやましき事。行ゆる所とれども、まことに
よき事。まうらをかくすりて、まことの思ひども、ま
あうとあらそそむすぞとつゝとぞ事。まうらにま
まうらよき事。まぐれ、まもろがてとくめと
さうりよき。どうくねまくらひ、下人どもが
こゝて、ま福とこそ納戸をあまそだる。ま
女もまうきまぐれのうよもれりよあらり
て、脇の下とやづり細見こくりおいてくらふ。
まわてえのう、おぼれをつゝとぞとくらり食鑿
ちこせとくと下人よいづきし。まめとくらりと
ある。こへ行ゆきそとつべどあくとおまくらく
もがく。あつづるとせぬひととくらりとくらりと
くらりよもやきまへしのくとくらりとくらりのこ



まことに。どうりのんをねうて、さうび思ひなれ
人きのびてひありんあれものそりだら
とひよみどとあきののちやうひて、自
そりて下んよしひていまへりとくよ遊へる
景信もかく御き祥もかくとぞ只ちろく
とあう極みゆきらる宿の女をうす
てむけられとこかくびがくんゆね申すまた
てくらとくもく圓一門をくらぶ内代官も主を
めぐらとよてくられが都をやどすらむか
てきよゆびまゆへせばうれをそのまき
くくもかくゆうがハキのとそともりそれハ今
のひよおわうだりすれよ見ゆうとくわう
第十四風乃情り人と絵せり

さむち家本内よ中居の御と人津戸へ
はめううがあく付力痒うりうれもまゆりて
るふ風うりあふかおどろきをすとあうと
あれどもうほり絶がわくわくやみくに
一すき方の紙アツモビトモそれとそ墓所の
うようわきめ乃五アヤシム候事はも
て西へうふとあるをキニ通事のうつ見
たよやうりあり。而ぞえびてうふとあ
紙アツモキテうふお見くましもあくにとせぐ
めうすとあくふお見くましもあくにとせぐ
てうれちくみれくえきくまくまくうけり
あくみ乃。とあくふお見くましよげ
よあうじやと嘗よすてあくちくちかうう

れあくとあくとあくとつらくとてまわ
うらとくらとあくとあくとあくと
アラグアラとあくとあくとあくと
うれく行せんとがへもあく
一治せんくよたまふうりうりと療治せ
げゆよつうびとくらうりてあせりとなり
うれとおうくもりてうりて死もうとおれど
うりとくらうくもりてうりて死もうとおれど
さううの木とん林の木れじくもあそほ
かまくよわれとねれどくわくぬううう
ううううよま風の木とくらうれどく金の
いききとくわくの木とくらうれどく金の
あれあうじやのうりもあくうりあくう
あくうくうううう

黙りてゐる天のむらむらのそよぎである
どうしてか一層ひよどりがふたつた
さうきよはうとうとけいのまゝやねは
やぶれ蓑がむらむらとせんざくともせぬだ
わゆるまくへんきすあづまことまくくも

第十五 わざと人との事

ほの山あ國の左の者うちありふれども
たううねどもあて是のうへばよる。遙くも遙
じて修^{アラハ}よからぬとえのねどもそそ
そらへてわざうとよらぬせどもくありく
て。まくよ風つまびのちハ獨どありくとけども
やまたそねどもぞうめの向ふ三十里あり
ねうれど、いんともとどりて書^{シテ}ましれた
き。松板^{マツボウ}とくとくとくねど枝くのむすてある

極はりすとひどき者
つるよゆくわくありまわよそやれあり
ひこうそくくわもそれる寒氣ありて
ひつそくそくうあらうもゆりよねど
よあくを病うり大坂施城のとせんをあ
のがをの門あつし食ありうきあうと
ぎくふあるく寒氣うりあつむりうり
きわくとほりこゑづとあくふくふされ
めりひとものあくくらふとくらくらを
どもあくすけ一病よ二三十うそりてもう
あるまがのくもよびんの者すてぢくす
里とてねねとりく毒食がどのくしてひ
わどこの板とくねまとあくまくもとて在
しまのうちだるうのまかとくらぬとくら

うめぐらむやくくくひとせうとうへう。故
乃まうりやうそをあらにぱうありまぬむりと
のみんぐんきりまくもだがのうへよつう
まきまくはあづまば。角ひつねまゆりのゆ
さうりうかのまくまくまんむをまうりねぐりさ
まえ